

# バドミントン競技ジュニア期におけるシングルスゲームの 時間的要素に関する研究

溝上 順平 (鹿児島大学)

## 1. 目的

本研究では、バドミントン競技ジュニア期のラリーポイント制において行われた男女シングルス競技に着目し、小・中・高のバドミントン全国大会における男女シングルスゲームのラリー期と非ラリー期の時間を測定する。それをもとに、今後のトレーニングにおいての基礎的資料を得ることを目的とする。

## 2. 方法

1) 分析対象試合 平成 27 年第 24 回全国小学生バドミントン選手権大会男女シングルス、平成 28 年第 46 回全国中学校バドミントン大会男女シングルス、平成 29 年第 45 回全国高等学校選抜バドミントン選手権大会男女シングルス、計 51 試合 (全 113 ゲーム) とした。

2) 分析方法 IBM SPSS を使用し、校種別男女間および同グループ内での比較を t 検定、男女別校種間の比較を一元配置分散分析で行い、多重比較検定は Tukey の HSD 法を用いた。有意水準は 5% 未満とした。なお、ゲーム開始から 5 ポイントまでをゲーム序盤、ゲーム終了までの 5 ポイントをゲーム終盤とした。

## 3. 結果と考察

1) 男女間比較 (校種別の男女間比較)

小学生非ラリー期と序盤非ラリー期において女子が有意に長い、中学生序盤ラリー期において女子が有意に長い、高校生男女に有意差なしという結果であった。一般的に、男子と比べて強い攻撃力を持たない女子のラリーは、男子のラリーより長くなる傾向にあるとされているが、

ラリー期の差は、中学生の序盤にしか見られなかった。その要因として、PHV (Peak height velocity) が影響を及ぼしていると考えられる。

2) グループ内比較 (校種別の序盤・終盤比較)

小学生は男女共に、終盤ラリー期、終盤非ラリー期が有意に長い、中学生は男子で、序盤非ラリー期より終盤非ラリー期の所要時間が有意に長い、高校生は女子で、非ラリー期において、序盤より終盤が有意に長いという結果であった。試合が進むほど体への負担は大きくなり、終盤非ラリー期の時間が長くなると考えられる。

3) 校種間比較 (同性の校種間比較)

男女ともに、ラリー期に大きな差は見られず、非ラリー期において、校種が上がるにつれて有意に長くなるという結果が表出した。

## 4. 結論

男女別について、小・中・高ともに、トレーニングの時間設定は男女同等で、ノックの配球の工夫など、トレーニング強度において男女差を設ける必要がある。グループ内について、ラリー期に大きな差は無く、序盤と同等時間のラリーを終盤にも行うことによって、非ラリー期の差が表出している。試合終盤に視点を置き、インターバルを終始一定に設定したトレーニングが必要である。校種別について、校種が上がると共に、時間的な変化は付けずとも、トレーニング強度に違いを設ける必要がある。

### <主な参考文献>

加藤幸司:バドミントン・シングルスゲームの分析—時間的要素からの分析—、慶応義塾大学体育研究所紀要 50 (1) : 1-8、2011